エルンスト・ユンガーの『労働者』
――戦死者追悼論の視点から――

川　合　全　弘

Ernst Jünger's „Der Arbeiter", from the Viewpoint of the Mourning for Fallen Soldiers

Masahiro KAWAI

1.　本稿の視点

エルンスト・ユンガーの『労働者』が刊行されたのは、1932年秋のことである。爾来80年余を経ても、この書の評価は一向に定まらない。卑見によれば、その最大の原因はこの書の複雑な構成にある。この複雑さゆえに、この書の主題を成す「労働者」についてさえ、それがはたして誰を指しているのか、たとえば実在する社会階級や政治勢力なのか、技術時代の人間類型なのか、記念碑的肖像として描かれた大戦の死者なのか、あるいはまた形態学的構想力によって捉えられた存在の原像なのか、が判然としない。このことがこの書の正確な理解を妨げ、それぞれこの書の一面だけに固執する、均衡を欠いた理解や偏った評価を生み続けてきたのでないかと思われる[1)]。本稿では、『労働者』の正確な理解の一助とすべく、軍事、文学、政治、形態学というこの書の特徴を成す4つの要素を析出し、戦死者追悼論の視点から構成全体におけるそれらの位置づけを試みたい。

初めに本稿の視点について説明する。第一次大戦の復員兵ユンガーは、戦没した戦友に対する追悼の念から、戦後、『忘れえぬ人々』（1928年）と題する大部の追悼文集を編んだ。そのまえがきの中で、彼は次のように述べている。「戦死者から受けた忘れがたい恩義、我々各々が彼らのことを片時も忘れてならない深い義務は存在しないだろうか。我々はそもそも彼らのおかげで生きているのではないだろうか。それゆえ我々が彼らをも我々の内心に生かすことは、正当なことではないだろうか[2)]。」ここでユンガーが語る戦死者追悼の主題は、従来もっぱら、ナチズムへと合流する当時のナショナリスト的政治の文脈において、あまりにも粗雑に理解されてきた[3)]。その結果、政治的な次元だけに限って見ても、戦死者追悼論を政治宣伝の道具とする時流に対してユンガーが当時首尾一貫して示した鋭い拒絶の姿勢にほとんど関心が払われないまま、このテーマに関するユンガーの言説を通俗的な英霊

崇拝論と混同して解釈する傾向が大勢を占めてきたように思われる[4)]。

しかし仔細に見れば、ユンガーの戦死者追悼論には、決して一筋縄で解釈できない多様で微妙な諸要素が含まれていることが分かる。管見によれば、それらは、物量が人間に優位する近代的な戦場の実態とその背後にある総力戦体制とへの冷静な認識、突然の死という恐怖の場面に集中的に注がれる視線と文学的に様式化されたそれの表現、死者と生者とを結び付けうる根源的な共同体への渇望と市民的現世主義的な政治観に対する嫌悪、存在するあらゆるものを統一する全体性の形態学的観想、などといった事柄である。それらは、自明的に存在する祖国と型どおりの英雄譚とに安住する通俗的な英霊崇拝論の枠組に決して収まらない、いかにも不調和で不安定な要因を形成している。しかし翻って、ユンガーの戦死者追悼論が出来合いの愛国イデオロギーの受け売りでなく、若くして大戦の当事者となった一世代による、戦死の意味解釈をめぐる手探りの試みであったことを念頭に置くならば、そこに複雑な諸要素が含まれることは、むしろ当然の成り行きであったと言うべきでないだろうか。しかもユンガーほどの並外れた資質を持つ文学青年にとって、戦死の意味解釈という重い課題と納得のゆく仕方で取り組むためには、通念に寄りかからず、自らが戦場と戦争の現実をできるかぎり正しく認識すること、死の恐怖を直視すること、人間の個性と共同性との関係をあらためて追究すること、あらゆる存在者の儚さと永遠の存在とに想いを馳せることが、不可避の途であったのではないだろうか。言い換えれば、ユンガーにとって戦死者追悼論は、およそ何らかの政治的言説たる以前に、彼の人格形成過程そのものの記録であり、青春を死地で共に過ごした一世代が戦死者の記憶を背負いつつ共同で形成する死生観の表現にほかならなかった。ユンガーは、大量死を目の当たりにした彼の世代が根本的な「不安」の世代であり、そうであるからこそ根本的な創造性を孕んだ新しい世代でもあることを、次のように強調している。「誠実な人生の本来の成果が独自のより深い性格の獲得であるのと同様に、本物の戦士にとってこの戦争の成果もまたより深いドイツの獲得以外にありえない。そうであることを証するものは、新しい世代の特徴を成し、この世のいかなる理念、過去のいかなるイメージによっても癒されることのない、あの不安である[5)]。」

1920年代におけるユンガーの各作品は、彼の戦死者追悼論に含まれる上述のような諸要素のそれぞれいずれかを主題とするものである、と言ってよい。他方『労働者』は、この視点から見るとき、20年代の各作品が個別的に主題化した諸要素を総合する、彼の追悼論の言わば集大成とも目すべき作品である[6)]。管見の限り、これまで『労働者』が追悼論として読まれたことは一度もない。しかしこの視点から眺め返されるとき、初めて全体の構成において占める各要素の位置が明らかとなり、この複雑な書が読解可能となる。これが本稿の視点である。本節の最後に、このことを証言するように思われる文章を『労働者』自体の中から引用したい。『労働者』の第1節末尾でユンガーは追悼論というこの書のいまだ注目されざる動機について、次のような印象深い言葉を述べている。「認識されるべきことは、支配と服務が同一であるということ、これである。第三身分の時代はこの一致の驚くべき

力を一度たりとも認識したことがない。というのも、第三身分にとっては、あまりにも安直であまりにも人間的な享楽が追求するに値するものと思われたからである。したがって、ドイツ人がこの時代に到達できたあらゆる地点は、それにもかかわらず到達されたのである。なぜなら、運動はあらゆる領域において異質で不自然な環境の中で行なわれたからである。本物の地面は、言わば潜水具を装着し潜水してしか踏むことができなかった。言い換えれば、決定的な労働は死の空間で遂行されたのである。愛の、もしくは認識の凄まじい孤独に打ちのめされ、あるいは戦場の燃え盛る丘の上で鋼鉄によって地面に打ち倒された、これらの戦死者に栄光あれ！[7)]」

2. 軍事

エルンスト・ユンガーは1914年に第一次大戦勃発後まもなく19才で志願兵となり、1918年の敗戦に至るまでの4年間の大半を西部戦線で過ごした。ユンガーの経歴は文字通りこの軍歴とともに始まる。また彼の作家としての経歴も、自身の戦場日記を題材とした作品『鋼鉄の嵐の中で』（1920年）によって開始された。それゆえユンガーを「戦争作家」として特徴づけることが言わばドイツ文学史の通説となっているものの、問題は「戦争」と「作家」との関わり方にある。通例、この問題は好戦主義や英雄主義という決まり文句で片付けられ、それ以上掘り下げて問われることがない。しかし『労働者』に含まれる軍事的な要素を正しく解釈するためには、この通念を乗り越える必要がある。ユンガーの戦争経験とその作品との内在的な関係を見る上で重要なことの一つは、この戦争における彼の立場がどのようなものであったかに留意することである。ユンガーは、和戦を決定する政治家、本営で戦略を立てる高級参謀、銃後で戦争の意義を論じる作家などとしてこの戦争を経験したのでなく、むしろ最前線の戦闘現場を指揮する若く優秀な下級将校の立場においてそれを経験した。このような戦争経験が作家としてのユンガーの自己形成に及ぼした影響は、戦争の是非や得失を論じるのでなく、むしろ戦争を既定の命令として受け止める姿勢を進んで内面化すること、これであったように思われる。ユンガーの数多くの戦争体験記を一貫する主題の一つは、生死の境においてこの姿勢が徹底されるとき、この命令が軍事階級組織の指揮命令系統をも超える「運命」の負託として実存的に感受される経過、すなわち「外的体験としての戦闘」が「内的体験としての戦闘」へと変貌する経過の報告である。

ユンガーが戦場で自ら内面化したこのような主体的戦闘者の姿勢が、『労働者』の全編を貫くエートスを形成している。逆に言えば、『労働者』という作品は、前線世代が言わば自らの五体を通じて達成したこの業績を、戦後の労働世界におけるあるべき生活態度の基準として活かそうとする文化革新の試みであり[8)]、そうすることを通じて戦死者の死の意義を「労働者の形態」の確立という点に求める追悼の試みであった。ユンガーは、戦場さながらの危険に満ちた労働世界を生きる労働者のある

べき姿勢について、次のように述べている。『労働者』のこの文章にかつての優秀な前線将校の肖像を認めることは、さほど困難でないように思われる。「個々人の態度は、彼が〔距離を置いた観察者の立場でなく〕その逆の状態、すなわち最前線の戦闘位置と労働位置に置かれることによって、むしろ重荷を負わされている。この位置を堅持し、それにもかかわらずそこに埋没しないこと、運命の素材であるばかりでなく、運命の担い手でもあること、生活を必然的なものの戦場としてだけでなく、自由の戦場としても理解すること、これこそ我々がすでに英雄的現実主義として特徴づけた能力である[9]。」

ところで引用文中の「英雄的現実主義」という語に見られるとおり、ユンガーが称揚するこの戦闘者＝労働者のエートスが英雄主義の後光を帯びていることは否みがたい。この点に、この時期までのユンガーの追悼論の限界を指摘することも可能であろう。それはなお、戦場における男性同盟的環境の決定的な影響の下に、言い換えれば死の色濃い影の下に置かれている。ユンガーの追悼論がいっそう幅広い人間的基盤を獲得するのは、1930年代後半以降である[10]。とはいえ、追悼論本来の趣旨から眺め返すならば、ユンガーの言説に孕まれる軍事ないし戦争の要素において最も重要な点は、決して戦死者の英雄性を際立たせることでなく、むしろ死の不可避性という人間の条件がことさら明白な真実として立ち現われる戦場を背景に人間の尊厳を追求すること、ここにあることが分かる。この点について、ユンガーは1927年の論文の中でこう語っている。「十分に理解するならば、重要なことは英雄的な光輝なのではなく、むしろ人間の尊厳そのものなのである。我々がそれをなお希求する限り、また我々が目的にのみこだわるのでなく意味にも関与しようとする限り、我々は生成したものであるばかりでなく、生成しつつあるものでもある。というのも、これら全てがそれ自体のために存在するのでなく、むしろ一つの比喩にすぎず、それらが何らかの仕方で捧げられ、犠牲に供されるということ、このことが人間の尊厳を形作るからである[11]。」

戦場で内面化された主体的戦闘者の姿勢というこの要素に加えて、『労働者』には明白に軍事的な性格を帯びるいま一つの要素が含まれている。それは論述の方法論と文体である。ユンガーは、第一次大戦の敗戦後新たに編成された国防軍にしばらく勤務し、1920年から1922年にかけて軍服務規程の編纂に従事した経歴を持つ。『労働者』が著者のこのような経歴を背景とし、軍事専門書の様相を帯びていることは、その用語法を一瞥するだけでも明白である。この書が軍隊における基本教練を模範とした方法論に基づいていることを、ユンガー自身がそのまえがきにおいて次のように述べている。「本書で試みたのは、〔労働者の形態を把握するための著者と読者との〕この重要な共同作業を、努めて基本教練の規則に従う実演という方法によって支援することである。基本教練において様々な素材は、常に同一の体得ができるよう反復練習するための機会として利用される。重要なものは諸々の機会でなく、むしろ体得の直観的な確実性である[12]。」

ここに言われる「基本教練」とは、軍隊において「回れ右」や「前へ進め」などといった基本動作

を統制する一定の動作様式を兵員に習得させるための訓練を指す。これを反復練習することによって、異なる諸個人の寄せ集めとしての軍隊が、いついかなる場でも一個の人体さながら統制の取れた振舞いをする有機的組織へと形成される。ここに述べられたユンガーの企図に従えば、『労働者』とは、今日の労働世界を大戦の戦場に見立てた上で、著者の実演とそれを範として読者自身が行う自己訓練との「共同作業」を方法とし、労働者の形態の把握、つまりは労働世界の現実に見合う人間像の把握を目指す、基本教練書である、と言ってよい。先述の要素が戦死者の業績の顕彰を通じて直接的に戦死者を追悼する意図を帯びるとすれば、この要素はこの追悼論の実践的意義を強調するものである、と言ってよい。

3. 文学

『労働者』の第二の要素は文学である。1998年に百二歳で亡くなるまで日記、エッセイ、小説など多数の作品をものするとともに、1982年のゲーテ賞を初めとして数多くの文学賞を授与された、ユンガーのその後の輝かしい文学的経歴と業績とから振り返るとき、『労働者』が20世紀ドイツ屈指の作家の手になる一文学作品として見られるべきことは論を待たない。しかしながら他方で、初期ユンガーの政治的エッセイを高く評価するアルミン・モーラーのような政治的知識人は別として、作家としてのユンガーを高く評価する人々の間で、文学作品としてのこの書の評価は分かれる。むしろカール・ハインツ・ボーラーの例に典型的に見られるように、文学外的な要素を多く含む『労働者』の評価は、そうであるがゆえに低い、と言ってよい[13)]。筆者に文学作品としてのこの書の評価という難題に踏み込む準備はない。ここでは追悼論の視点から、この書に含まれる文学的要素の構成上の位置について述べることにしたい。

従来、そもそも『労働者』で展開されるユンガーの市民文化批判が主に文学的な資料と方法とに基づいているという事実自体に、ほとんど注意が払われてこなかったように思われる。この書の第二部で重要な位置を占める市民文化批判の内容は、第一に「労働」という20世紀の生活方法が一般化するにつれ、旧来の市民文化が妥当性を失い、いまや形骸化した教養主義（「博物館的活動」）へと堕してしまっていること、第二に市民文化の実質を成す個人（インディヴィードゥウム）の人間像が労働者すなわち類型人（テューポス）の人間像に取って代わられつつあること、として要約される。従来これらの所説は、単に市民的自由主義を批判するためのイデオロギー的主張として受け止められ、所説の背景を成すユンガーの文学的経歴と所説の裏づけとして用いられている文学的な資料とが見落とされがちであった。その原因の一つに、ユンガーがこれらの所説のために用いた資料を匿名化している、という事情が挙げられるように思われる。匿名化の理由についてはさしあたり推測の域を出ないために、ここではさて置き、まずはこれらの所説のためにユンガーがどのような資料と方法を用いているかを確認することにしたい。

まず、上述の第一の所説について見てみよう。ユンガーは、市民文化の批判に際して、決してその末期段階たる博物館的活動への紋切り型の批判に終始せず、むしろその当初に立ち戻り、市民的個人の生き生きとした原像を想起しようとする。ユンガーが引用する資料は、その題名、登場人物名、断片的な引用句、前後の文脈などから筆者が推測するところによると[14)]、言わば個としての人間の尊厳に関して西洋近代市民文学が提供してきた、次のような第一級の証言ばかりである。すなわち、バルザック『人間喜劇』、ルソー『新エロイーズ』、サン・ピエール『ポールとヴィルジニー』、ホイットマン『草の葉』、ニーチェ『権力への意志』、ゲーテの『ファウスト』と『エピグラム』と『西東詩集』と『原詞 オルフォイス風に』、ヘルダーリン『祖国のための死』、デフォー『ロビンソン・クルーソー』、ゾラ『サロンのレアリストたち』、イプセン『ある詩』、ボーマルシェ『罪ある母』、カント『実践理性批判』、ディドロ『ブーガンヴィル航海記補遺』、ユイスマンス『彼方』、ランボー『酔いどれ船』がそれである[15)]。筆者の見落としもなお多々あるかと思われる。ともあれこれらを見るだけでも、ユンガーが市民文化をもっぱらその末期的水準において安易に超えようとしているわけでないことが分かろう。

次に上述の第二の所説について見てみる。ユンガーは、個人と類型人との交代についても、それをイデオロギー的に主張するのでなく、むしろ現代都市の観察を通じてそこに生きる人間の表情や態度に現われつつある変化の兆候を記録するという、観相学的観察の方法を採る。匿名化されているものの、観察の舞台は、20年代末から30年代初めにかけてのベルリンである[16)]。観察の対象とされた事物は、交通、電力、水道、ガス、電話、信用制度などの都市インフラストラクチュアの発達とそれによって機能的な仕方で統合される市民社会の変貌、複製技術の発達による芸術とその受容とのあり方の変化、時間的かつ空間的な「現在」についての情報を精確かつ高速度に伝達する新聞やラジオや映画ニュースなどの大衆媒体の発達とそれによって媒介される生活空間の一様性と全体性の感覚、衛生学的配慮を伴う日光崇拝と肉体文化との流行、人間の表情の仮面さながらの硬直化と日常生活への制服とマスクの浸透などである。そしてユンガーがこれらの兆候から読み取る本質的な出来事は、人間が人物の威厳や個人の特性を喪失し、もっぱら外的な指標によって自らのアイデンティティを受け取る類型的な存在と化してゆく経過である。この経過を記述するユンガーの筆致は、否定と肯定の両義性を帯びるとともに、この経過が市民的近代そのものに由来することへの鋭い洞察を含んでいることから、安易な評価を許容しない。ユンガーの所説は、ベンヤミンを初めとする同時代の左派的な市民文化批判と多くの点を共有しており、両者の比較も興味深い課題であろう。

さてこれらの所説は『労働者』の構成全体の中ではたしてどのような位置を占めているのであろうか。もし『労働者』が追悼論の集大成として書かれた作品であるとするならば、これらの所説もまたその一翼を担っているはずである。『鋼鉄の嵐の中で』を初めとする戦場日記が戦死の場面や実在の戦死者の思い出を描き、また文学的エッセイ『冒険的心情』が死の恐怖についての美学的な考察を展

開することによって、ともに追悼論の主題と比較的明白なつながりを示しているのに対して、『労働者』におけるこれらの所説からはそれが直ちに浮かんでこない。とはいえこれらの所説が、上述のように西洋近代市民文学の古典的作品群の引用に基づいていること、そして著者ユンガー自身がその流れに連なる一人であることを念頭に置くならば、ここで展開される市民文化批判は、市民文化に対する外在的批判であるのでなく、むしろその末裔自身による言わば自らの母胎に対する内在的な批判であることは明らかである。ユンガーは1923年に『シュトュルム』と題する自伝的な小説を著している[17)]。それは、末期市民文化の息子シュトュルム少尉とその戦友の若い少尉たちとが戦争の恐怖からの一時的な避難所を求めて戦場で交わすデカダンな文学談義を題材とした小説であり、その中で彼らの心の拠り所とされたものは、まさに『労働者』で援用された作品群であった。この小説は、文学に生の最後の希望を託した主人公シュトュルム少尉の突然の戦死によって締め括られている。こう見てくるならば、近代市民文学の古典的な作品群を引用しつつ市民文化を批判する『労働者』の所説は、小説の主人公シュトュルム少尉と同様にそれらを背嚢に携えながら戦場に散っていった戦友たちへの、形を変えた弔辞でもある、と言うことができるのではないだろうか。そして個人と類型人との交代を論じる、現代都市の観相学的考察に関する所説は、今日の労働世界において失われてゆくもの――個人の尊厳――の大きさを、断崖の縁においてあらためて想起しようとする、末期市民作家の努力の表現とも言いうるように思われる。

4. 政治

『労働者』の第三の要素、そして従来一般に最も注目されてきた要素は、政治である。この書が刊行されたのは、ヒトラーによる政権掌握に先立つわずか数ヶ月前の、1932年秋のことである。著者ユンガーは、当時ワイマール共和制とヴェルサイユ体制とに対立する急進的なドイツ国民主義者の陣営に属する代表的思想家の一人と目されていたことから、この書が目前に迫ったドイツの大規模な体制転換を予告し、それに対して新たな精神的原理を提供しようとする、一種の国民革命の綱領書として一般に受け止められたことは不思議でない。他方また、ユンガーの盟友エルンスト・ニーキッシュのように、この書を、ソヴィエト体制を範とするナショナル・ボルシェヴィズムの宣言書と見る評価もしばしば見られた。ナチズムかソ連型共産主義かの相違はあれ、いずれにせよ『労働者』を、自由主義体制の否定と全体主義的な国家モデルの称揚とを内容とする政治的文書と見なす傾向が、今日に至るまでこの書の受容史における大勢を占めてきた、と言ってよい。

翻って著者ユンガー自身は、1930年代後半以降、このような政治的評価に対してのみならず、総じて政治そのものに対して、首尾一貫して距離を置く姿勢を示し続けた[18)]。後年におけるユンガーのこのような脱政治的ないし無政治的姿勢と、『労働者』が帯びる明白な政治的性格とは、はたしてどの

ように整合的に解釈されうるのであろうか。

政治に距離を置くユンガーの姿勢が、第二次大戦後の激変した政治環境の中で、自らの作家としての名声を貶めかねない政治的論議を避けるための身振りという側面を持っていたことは否めない。『労働者』の外国語訳の企図に対して、ユンガーが長らく反対し続けたことも、彼自身のそのような意図に由る[19)]。しかし他方で、ユンガーの作家としての長い経歴と彼の作品全体とを俯瞰するとき、彼の無政治的姿勢には、単なる身振りを超える本質的な要因を認めることもできるように思われる。言い換えれば、そこには、通俗的な意味における政治とユンガーの作家精神との本質的な疎遠さの表現が認められる。この問題を考える上では、先の軍事的要素の場合と同様、何が作家ユンガーと政治とを結ぶ内在的な媒介項となったのかということを見極めることが重要である。

ユンガーが1920年代後半に急進的なドイツ国民主義者として振る舞い、その延長上に位置する『労働者』が強烈な政治的メッセージを発していることは、否定しようのない事実である。何故この限られた時期にだけ、ユンガーは政治に関与したのか。しかもそれは何故あれほど激越な急進主義の形式を取ったのか。愚見によれば、ユンガーと政治とを結ぶ、ほとんど唯一と言ってよい媒介項は、彼と彼の同世代とにとってまことに切実な戦死者の追悼という動機であり、そのことが彼の政治思想を急進的にした[20)]。生者と死者との間には、両者を隔てる偶然の死しか存在しないのか。それとも両者を結ぶ必然の絆が存在するのか。もしそれが存在しなければ、追悼の行為は成就せず、国民は諸個人の偶然で仮初の集合と化してしまうのでないか。ユンガーは、このような問題意識に立って、『忘れえぬ人々』と題する上述の追悼文集を編んだ。その「まえがき」の中でユンガーは、次のように述べている。「あらゆる現象におけると同様、戦争と軍隊においても、偶然的なものを見るのでなく、むしろ生の一表現、すなわちその全き力と冷厳さの表現、そしてまたどんな合目的的考慮をも越えるその意味の表現をも見る者にとっては、個々人の死もまた――純粋に一身に関わる限り、どれほど残酷で取り返しがつかないものに思われようとも――、決して偶然で無意味な死ではありえない。必然的なものに依拠する考察が総じてそうであるように、このような考えから生まれてくるものは、より深い慰めとより高い安心である。個々人の死というこの破壊が、もし単に本人の身に降りかかるだけで、生のより大きな構造において起こるのでなければ、それは、軍隊の肉体に、そればかりかさらに民族の肉体に、決して癒されることのない無数の傷を負わせることになる[21)]。」

卑見では、『労働者』もまた、ユンガーのこのような問題意識に根差し、政治をもっぱら戦死者追悼の営為と見る彼独自の政治観の一表現である。それは、第一次大戦の戦死者の追悼を最大の動機として前線世代によって前線世代のために書かれた前線世代の政治綱領にほかならない。ユンガーが「形態」について論じる次の、あまり顧みられることのない文章は、『労働者』のこの半ば秘められた動機を明示している。「真の形態は、それに対して全ての能力が捧げられ、最高の敬意が注がれ、極度の憎しみが向けられるという事実を通じて、それと認識される。真の形態は、自らの内に全体を秘

めているので、全体を要求する。それゆえ、人間が形態とともに自らの使命、自らの運命を発見することになるのであり、そして戦死にその最も重要な表現を見出す犠牲行為を人間に可能ならしめるものは、この発見なのである。……ドイツ前線兵は単に敗れなかったばかりでなく不滅でもあることが実証された。……今日これらの戦死者はことごとく以前にもまして生き生きとしている。それは、彼らが形態として永遠に属するからである[22]。」

『労働者』に顕著に認められる、「全体性」へのユンガーの激越な希求[23] は、ここで述べられているような、戦死者追悼の動機を抜きにして理解することができない。とはいえ、『労働者』と、ユンガーの国民主義期に属する『忘れえぬ人々』との間には、一つの顕著な相違が存在する。というのも、『労働者』では国民国家が19世紀の国家形式にすぎず、20世紀にやがて地球規模の労働国家によって取って代わられることが予測されるからである。ユンガーによれば、労働者の時代において国民国家はもはや真の全体性の代表たりえない。むしろ労働者の形態による地球規模の総動員といういっそう包括的な過程の中で、国民主義は社会主義と並んでこの動員を推進する力の一つという副次的な地位を宛がわれる[24]。かつて国民主義期にユンガーが「ドイツ人の性格」や「秘められたドイツ」に求めたこの全体的なるもの[25] は、いまや「労働者の形態」に見出され、労働国家がそれを代表することになる。

5. 形態学

さて『労働者』を構成する第四の要素として挙げられるものは形態学である。これの主な起源は二つ考えられる。一つはゲーテ研究であり、今一つは動植物学研究である。『労働者』における形態概念に影響を及ぼしたと思われる要因は、もちろんこの二つ以外にも多々挙げられる[26] ものの、その起源がユンガーの少年期にまで遡り、かつ彼の終生に及ぶ関心の対象となったものは、この二つだけである[27]。ゲーテ研究と動植物学研究とは、動植物の形態への関心という点で交わる[28]。動植物の形態は、人間の作為の産物でなく、自然が自己の内部から生み出し、自己自身に与えた有機的な秩序である。『労働者』の読解に際して問題となることの一つは、「労働者の形態」がどこまでこの形態学的な意味における形態として理解できるか、という点にあろう。

この問題に関して、小野紀明氏の研究が決定的な解釈を示している。やや長文に亘るが、重要と思われるのでその結論部分を以下に引用したい。「形態学の系譜を辿ってきた我々には、『労働者』において提示された“形態”と“有機的構成”の概念が、断じて幾何学的形式とそれらを組み合わせた機械論的秩序化を意味してはいないことは、それどころかそれらに対立するものですらあることは、もはや明らかであろう。“形態（ゲシュタルト）”とは、悟性的認識をもってしては捉ええない事物の根源的な形（フォルム）である。現実という表層の裏面には、“形態”をそのものたらしめている形態学的秩序が貫かれており、“有機的構成”はこの根源的秩序の顕在化によって成立する。それは、ユンガーの芸術家としての透徹した

眼差しが洞察した美的秩序である。この秩序の実在を信じる点でユンガーは生涯にわたって変わることはない。この信念は、表現主義者ユンガーにおいても、『労働者』の著者ユンガーにおいても、そして無論『平和』によって感銘を与えるユンガーにおいても牢固として微動だにしていない。現実世界を蔽う無意味な秩序を解体すれば、自ずとこの形態学的秩序が露呈することを確信して、市民的秩序の破壊に全力を傾けたのが表現主義時代のユンガーであったとすれば、この秩序そのものを正面に捉えてあるべき共同体を構想したのが、『労働者』であった。その意味で、二〇年代の混沌とした運動の称揚と『労働者』における静態的秩序への依拠との間にも、何ら矛盾は存在しない。そればかりか、『大理石の断崖の上で』の主人公が探求する植物の秩序も、『砂時計の書』（一九五四年）において落下する砂の動きを見つめながらユンガーが思いをはせる悠久な宇宙の秩序も、戦場において彼が体験したそれ、そして労働国家の基礎であるべきそれと、全く同じものである。ナチス時代をはさんだユンガーの長い生涯を通して、彼の思想は驚くほど一貫している[29)]。」

筆者は、このたび小野氏によるこの解釈を反芻することを通じて、『労働者』において形態学的要素が占める位置の重要性と、『労働者』におけるユンガーの秩序観をもっぱら機械論的なものと見なした筆者のかつての解釈[30)] を修正する必要とを、痛感した。また他方で、本稿における筆者の視点からあらためてこの問題を捉え直してみるならば、『労働者』の秩序観が機械論的なものでなく、むしろ有機体論的なものでなければならないことは、当時のユンガーにとっては当然であった、とも言いうる。というのも、もしそうでなければ、ユンガーの追悼論が完結しないからである[31)]。「労働者の形態」が機械論的な発想でなく、むしろ形態学的な発想に基づくものであることは、いまや明白であるように思われる。問題は、もはやユンガーの発想が機械論と形態学とのいずれにあるのかということでない。むしろ今後それは、「自然」の形態学的秩序に由来するユンガーの発想が、機械論的様相を帯びる労働者の「歴史」的事象を解釈する上でどの程度有効でありうるのか、という形で問われなければならないように思われる。

6. おわりに

初期ユンガーの主著『労働者』は、時代の大事件との深い関わりのゆえに、彼の数多くの作品の中でも従来最も激しく論議されてきた著作である。しかしながら他方でそれは、相互の関連を見極めがたい複数の要素から成る、その複雑な構成のゆえに、今に至るまで正確に理解されてきたとは言いがたい著作でもある。本稿は、軍事、文学、政治、形態学という四つの要素を析出し、追悼論の視点から、この書の構成におけるそれぞれの位置づけを試みた。これらの諸要素は、この書の顕著な特徴を成すものとして、個別的にはいずれもすでに指摘され、論じられもしてきたものばかりである。しかしながら、それら相互の間にいかなる関連が存在するのかが不明であるために、結局のところ『労働者』

がいかなる書であるのかがよく理解されないまま、千差万別の評価が行われてきたように思われる。

本稿が試みたことは、この混乱を打開するために、追悼論の視点を導入することであった。『労働者』へと至る初期ユンガー[32]の全ての著作は、第一次大戦における戦死者の追悼という共通の主題を有する。『労働者』以前の各作品がこれをそれぞれ個別専門的な次元で論じたのに対して、『労働者』は言わばそれらの集大成として書かれた。『労働者』以後の中期ユンガーは、次の大戦の切迫した予感と共に始まる。その大戦が先の大戦を大きく上回る犠牲者をもたらした後、ユンガーの追悼論はその性格を大きく変えていったように思われる。

註

1）このことはひとり『労働者』について言えるばかりでなく、多面的な作家ユンガーの全ての作品について大なり小なり当てはまる。ユンガーの処女作『鋼鉄の嵐の中で』の戦前における邦訳（佐藤雅雄訳『鋼鐵のあらし』先進社、1930年）は、この種の不正確な読解の典型的な事例である。「兵語が多いから現役の将校でなければ翻訳がむづかしいだらうといふので廻り廻って訳者に相談があった」（同書、一頁）という、この邦訳では、なるほど軍事用語と軍隊事情とへの造詣に見るべきものがあるものの、原著が持つ文学的興趣がものの見事に抜け落ちてしまっている。訳者の一面的な軍事的関心が軍事以外の要素に対する目配りを妨げてしまったのではなかろうか。

2）次の拙訳を参照されたい。エルンスト・ユンガー『追悼の政治――忘れえぬ人々／総動員／平和』月曜社、2005年、3頁。

3）とはいえ、この主題に関する標準的な研究書の著者モッセは、炯眼にも、ユンガーの戦死者追悼論と通俗的な英霊崇拝論との質的な差異に留意して、次のように述べている。「戦争体験神話は全くの虚構であったわけでない。……ドイツの作家エルンスト・ユンガーのような人々は、戦争の回想において疑いもなく誠実であった。」George L. Mosse, *Fallen Soldiers. Reshaping the Memory of the World Wars*, Oxford University Press, 1990, pp. 7f.

4）ちなみに筆者は、そのような粗雑な解釈を修正するために、戦死者追悼論を核心とするユンガーの政治観を「追悼の政治」として要約し、その主題の下に彼の三つの作品を編集して邦訳した。本稿の視点について、詳しくは前掲拙訳の解題「エルンスト・ユンガーにおける追悼論の変遷」（前掲書、163～199頁）を参照されたい。

5）前掲拙訳、75～76頁。

6）文学的に様式化された「恐怖」の表現に対する関心からヨーロッパのモデルネ文学の広い視野の中でユンガーの初期作品を考察したボーラーの研究『戦慄の美学』（1978年）が、もっぱらそれを主題化したユンガーの作品『冒険的心情』（1929年）を高く評価する一方で、それと異質な諸要素を混在させる『労働者』をさほど重視しなかったことは、ボーラーの関心から見ても、筆者の解釈から見ても、言わば当然のことであった。次を参照されたい。Karl Heinz Bohrer, *Die Ästhetik des Schreckens. Die pessimistische Romantik und Ernst Jüngers Frühwerk*, Ullstein Materialien, 1983, S. 470ff.

7）Ernst Jünger, *Der Arbeiter: Herrschaft und Gestalt*, Hanseatische Verlagsanstalt, 1932, SS. 13f.

8）総じて1920年代後半に隆盛を迎えるドイツ前線世代による大戦の回顧が、同世代による市民文化革新の試みという意義を持ったことについて、次の拙稿を参照されたい。「戦争体験、世代意識、文化革新――ドイツ前線世代についての一考察――」、川合全弘『再統一ドイツのナショナリズム――西側結合と過去の克服をめぐって――』ミネルヴァ書房、2003年、175～203頁。

9）Jünger, *Der Arbeiter*, S. 63.

10）ユンガーの追悼論の変遷については、註 4 に挙げた拙訳解題を参照されたい。

11）Ernst Jünger, „Nationalismus und modernes Leben“, *Arminius*, Nr. 8, 1927, S. 5.

12）Jünger, *Der Arbeiter*, S. 7.

13）前掲註 6 を参照されたい。ちなみにユンガーの死去に際してジートラーが述べた言葉も、ボーラーと類似した評価を示している。Vgl., Wolf Jobst Siedler, *Berliner Zeitung*, 18. 02. 1998.

14）言及される作品の作者名が全く示されず、題名についても引用符がほとんど付されていないために、引用や言及であることが分かりづらい箇所が多々ある。一例を挙げると、ゲーテの『ファウスト』が引用符なしにただ ihren Faust と表記されている箇所がある。これは、直前に置かれた形容詞の語尾が男性 4 格の変化形をとっていることから、男性の人名を表していることが分かる。ここからこれがゲーテの『ファウスト』を指していることが推測されるものの、――文法的には無理だが――前後の文脈から考えるならば一般名詞の「拳」（女性名詞）として解釈することもあながち不可能とは言えない。Vgl., Jünger, *Der Arbeiter*, S. 198. ただし 1981 年の全集版では、Faust に引用符が付されている。

15）『労働者』におけるこれらの引用ないし言及の箇所とそれぞれの出典については、次の拙訳を参照されたい。エルンスト・ユンガー『労働者――支配と形態』月曜社、近刊。

16）ユンガーは 1927 年から 1933 年までベルリンに住み、『労働者』の資料集めと執筆の傍ら、この大都市の散策と観察に励んだ。『労働者』第 34 節における都市観察は、匿名化されているものの、ベルリンが主たる舞台となっている。特にその第 12 段落で述べられる地域ごとの都市景観はベルリンのそれと一致する。

17）Ernst Jünger, *Sturm*, Sämtliche Werke, Klett-Cotta, Bd. 15, SS. 9~74.

18）例えば、ユンガーの百歳誕生日に際して『シュピーゲル』誌が行ったインタヴューにおいて、彼は次のような発言をしている。「私は一度も党派に属したことがありません。政治には特に興味があったわけでないのです。」”Wie ein Geschoss zum Ende”, *Der Spiegel*, 13/1995, S. 240.

19）ユンガー自身の言葉を借りれば、翻訳に対する反対は、翻訳を通じた粗雑な理解が不可避的にもたらす「政治化という厄介事」を避け、彼がようやく手に入れた「好ましい凪」を維持するための防衛措置であった。Vgl., Ernst Jünger, *Maxima-Minima. Aus der Korrespondenz zum >>Arbeiter<<*, Sämtliche Werke, Klett-Cotta, Bd. 8, S. 389f. なおミュールアイゼンによると、部分訳を別とすれば、『労働者』の最初の外国語訳は、Quirino Principe の手になるイタリア語訳（1984 年刊行）である。他に、Julien Hervier によるフランス語訳（1989 年刊行）と Andrés Sànchez Pascual によるスペイン語訳（1990 年刊行）とがある。英語訳はまだない。次を参照されたい。Horst Mühleisen, *Bibliographie der Werke Ernst Jüngers*, Cotta, 1996. ユンガーの他の数多くの作品が、フランスではすでに第二次大戦前から、イタリアでは第二次大戦中から翻訳されたのに対して、色濃い政治的性格を帯びる『労働者』の翻訳がこれほど遅れたことには、やはり著者ユンガー自身の反対が大きく関与したものと思われる。

20）詳しくは、註 4 に挙げた解題を参照されたい。

21）ユンガー『追悼の政治』、15 頁。

22）Jünger, *Der Arbeiter*, SS. 36f.

23）『労働者』には、労働者の時代の特質を言い表すために、「全体的革命（die totale Revolution）」、「全体的空間（der totale Raum）」、「全体的支配（die totale Herrschaft）」、「全体的動員（die totale Mobilmachung）」、「全体的戦争（der totale Krieg）」などという形で、「全体的」という形容詞が頻出する。

24）Jünger, *Der Arbeiter*, SS. 235~245.

25）「ドイツ人の性格」は『忘れえぬ人々』において、「秘められたドイツ」は『総動員』（1930 年）において唱え

られた。

26）例えばヘルムート・キーゼルは、ゲーテの「原植物」の表象の他に、特にシュペングラーの『西洋の没落』とレオポルト・ツィーグラーの『神々の形態変遷』（1920年）からの影響を指摘している。Helmut Kiesel, *Ernst Jünger. Die Biographie*, Siedler, 2007, S. 388.

27）ユンガーはすでに幼い頃から母を通じてゲーテの作品に触れていたようである。ゲーテ賞授与式の謝辞において、彼は次のように回顧している。「この機会に、ゲーテとその作品とに対する私の個人的な関係についてお話ししたいと思います。それは強いものです。私はそもそも彼とともに育てられたからです。母がこのお気に入りの詩人を引用しない日は一日とてなく、またほとんど毎年のように母はワイマールにあるゲーテの家を訪れました。まもなく彼女は、自分の喜びを私たちにも味わわせるために、私たちを一緒に連れて行くようになりました。『ここに人間がいる。』彼に対する私の愛と彼の世界との取り組みとは、十年毎にいっそう深まっていきました。私の読者はそれを知っています。」Ernst Jünger, *Einleitung der Dankrede bei der Verleihung des Goethe-Preises*, Sämtliche Werke, Klett-Cotta, Bd. 22, 2003, S. 411. 長じて後、ユンガーは集中的にゲーテ著作集の研究に従事した。それは、彼の二十歳代半ばにあたる、国防軍在職中の時期である。1920年1月7日付けの弟フリードリヒ・ゲオルク宛の手紙において、ユンガーはこれについて次のように述べている。「ここアイトルフで僕は実に快適な生活を送っている。我々の主たる任務は、密輸業者を取り締まるために、警戒やパトロールを行うことだ。……でも晩になれば、僕はたいてい膨大なゲーテ著作集の研究と取り組む。僕はそれを一頁また一頁と読み続けている。来年にはドイツ文学と哲学の概略的知識を手に入れたいと思っている。」Heimo Schwilk（Hg.）, *Ernst Jünger. Leben und Werk in Bildern und Texten*, Klett-Cotta, 1988, S. 84.

他方、ユンガーの動植物学研究も少年時にまで遡る。彼はレーブルクに移り住んだ十三歳頃から昆虫採集を始めたという。次を参照されたい。E. ユンガー『小さな狩――ある昆虫記』山本尤訳、人文書院、1982年、7頁。昆虫や植物の採集は、趣味の域を超えて、ユンガーの終生にわたる仕事となった。彼が発見したいくつかの新種の甲虫には、彼の名前が冠せられている。

28）ゲーテ研究と動植物学研究とはたしかに動植物の形態への関心という点で交わるものの、形態学に関わる前者の影響の具体的な証拠は『労働者』の原文の中に極めて乏しい。ゲーテからの引用と推定できる箇所は上述したようにいくつかあるものの、それらは全てゲーテの文学作品からの引用である。ただし1箇所（*Der Arbeiter*, S. 221）でだけ形態学的思想を述べたゲーテの詩の一句と思われるものが引用されている。ユンガーとゲーテとの美学的文学的関連を論じた研究において、著者のChungがそれを指摘している。次を参照されたい。Wonseok Chung, *Ernst Jünger und Goethe. Eine Untersuchung zu ihrer ästhetische und literarische Verwandtschaft*, Peter Lang, 2008, SS. 129f. 他方、『労働者』の補足として書かれた後年の二つの作品の中で、ユンガーは明示的にゲーテの形態学を基準としつつ自らの形態概念を説明している。これらを見る限り、「労働者の形態」概念に対するゲーテの形態学の影響は明白である。次を参照されたい。Ernst Jünger, *Maxima-Minima. Adnoten zum >>Arbeiter<<*, Sämtliche Werke, Klett-Cotta, Bd. 8, SS. 319~387, und ders., *Typus, Name, Gestalt*, Sämtliche Werke, Bd. 13, SS. 83~174. 例えばユンガーはこう述べている。「労働者を超人やプラトン的な理念として見るとすれば、それは誤りでしょう。むしろ労働者はゲーテの原植物の意味における形態として見られるべきです。また形態は類型ではなく、類型を形成する力を持つものなのです。」Jünger, *Maxima-Minima*, op. cit., S. 395. ただしこれらの作品と『労働者』との間には、三十年余の歳月の隔たりがあることにも留意しなければならない。というのも、この間に、「労働者の形態」に対するユンガーの関心は、形態の政治的現象的側面から形態の概念そのものへと大きく移行していったからである。

29）小野紀明『現象学と政治――二十世紀ドイツ精神史研究』行人社、1994年、313頁。

30）次の拙論を参照されたい。「エルンスト・ユンガーにおける歴史意識の問題――ナチズム期を中心として」、京大政治思想史研究会編『現代民主主義と歴史意識』ミネルヴァ書房、1991 年、202 ～ 219 頁。筆者はこの拙論においてユンガーの秩序思想を、機械論的秩序の英雄主義的肯定として論じた。

31）これは必ずしも、機械論的な国家観に立つ追悼論がありえない、という趣旨ではない。後年のユンガーにおいては、追悼論への関心が終生続いたように思われる一方で、国家を形態学的な秩序の代表と見なす国家観が消滅し、Waldgänger や Anarch といった極端に個人主義的で、言わば無政治的な人物像が登場する。そのような国家観や人間観に見合う追悼論が成り立ちうるか否かは、また別の問題である。

32）筆者は、註 4 に挙げた解題において、ユンガーの作品全体を初期、中期、後期の 3 期に分ける解釈を提案した。詳しくは、それを参照されたい。